本書を作成するにあたって

次田香澄

『うたゝね』は、阿仏が若き日の失恋の傷みを癒やすべく、涙でつづった回想記で、純真で愛らしい短篇作品である。スケールは小さいながらも、よくまとまったこの自伝文学の存在は、文学史上あまり目立たないで近年に至った。

阿仏は、実は鎌倉後期の女流作家・歌人として古くから知られてきた。通俗的にも著名であることは、例えば京都の時代祭に登場する中世婦人列のなかに彼女の姿があることでもわかる。しかし阿仏が有名になったのは、主として『十六夜日記』によってであり、わが子為相に歌道家を継承させたいと念願する作者が、所領訴訟のため鎌倉へ自ら旅をするという当時としては珍しい内容のゆえであろう。しかしその『十六夜日記』は、文芸作品としてみると必ずしも純粋にすぐれたものとは認めがたく、近来は古典文学の叢書類でもこれを省くものが多くなっている。阿仏の作品として、より価値の高いのは『うたゝね』である。

筆者は早くこの作品の読解、内容の検討から始まって、文学史的な解明を志してきたが、先年たまたま京都御所、東山御文庫に『うたゝね』の古写本が蔵せられ、宮内庁書陵部にその写真があることを知り、書陵部の図書調査官橋本不美男氏を通じてその頒布を受け、記録によって写本の形態について知るとともに、氏より成立等の御意見もうかがった。

それを契機として諸本の調査・校勘を行った結果、諸本のなかでは東山御文庫本が最も信憑性の高い写本であると判断したので、これを底本として本文の整定を試み、成立、構成と主題、表現、伝本についての解説と校異

とを加えた「うたゝね考—付・東山御文庫本（翻刻）」（二松学舎大学論集、昭和四十七年度）を発表した。ついで五十年六月、これを吸収して校注を付し、『うたゝね』（笠間書院刊、渡辺静子氏『竹むきが記』と合本）を刊行した。この論考・著書ともに、写本や語彙などについては酒井憲二氏の協力をいただいたところがあった。

このたびは、以上の基礎的段階をふまえ、本文の影印・翻刻・校異および索引等を作成することとした。本書は酒井氏を中心とし、氏の信条とする厳密な国語学的方法によっているのが特徴といえよう。翻刻本文は文節分かち書きとされ、校異はより厳正が期され、「かな字体表」も設けられている。索引篇は全く氏の努力によって成ったものであるが、索引には語彙考が伴うべきだという氏の見解によって「索引による語彙考察」を加えてあり、また本書をあえて「総索引」と名づけなかったのも、同じく、真の「総索引」は『万葉集総索引』（正宗敦夫編）の如き形態の整備したものをいう、とする考え方によった。

要するに、本書は校注書『うたゝね』と姉妹篇をなすものであり、校注書の解説・整定本文・校注に対し、本書は底本である東山御文庫本の影印・翻刻本文、および索引・語彙考察を収めたものである。これらによって『うたゝね』の文献学的な諸相はほぼ究明されたと思う。

筆者らは、これまで写真によって推測してきた東山御文庫本の原態を、実際に確認しこれを正確に再現するためには、ぜひ写本を拝見して直接写本について調査し、より良い状態の写真を作製するところから再出発する必要があると考えていたが、勅封の御物であるため、この『うたゝね』は何年か先の曝涼の時期を待たねばならぬはずであった。然るにこのたび特別の許可をいただくことができたのは、望外のしあわせであった。侍従長入江相政氏の公私にわたる御厚意に対し心から感謝申し上げたい。阿仏の子冷泉為相の後裔である入江氏のお世話になったことも、思えば何か因縁がありそうである。種々御厄介になった侍従職専門官市川惣吉氏にも、お礼申し上げる次第である。また尊経閣文庫（太田晶二郎氏）の御好意にも深謝したい。

筆者らは十月二十二日、東山御文庫を参観し、曝涼所において、『うたゝね』の写真撮影に立会うとともにその原態を子細に検討することができた。折から雲一つない秋天の下、時代祭の行列の出発で御所の外は賑わっていたが、障子越しのやわらかな日のさす畳敷きの部屋で、『うたゝね』を手にとって見たときの感銘は忘れがたい。

なお本書は、旧知の笠間書院社長池田猛雄氏の御協力により出版の運びとなったものである。

（七五・一〇・二六）